

■研究活動

〈生活一文脈〉から考える映画『プリズン・サークル』における痕跡

〈生活一文脈〉理解研究会  
打越 正行, 宮内 洋, 松宮 朝, 新藤 慶

Reconsidering the Film “Prison Circle” from the Perspective of  
the Context in Everyday Life

UCHIKOSHI Masayuki, MIYAUCHI Hiroshi,  
MATSUMIYA Ashita, SHINDO Kei

人間発達学研究 第13号

2022年3月

愛知県立大学大学院人間発達学研究科

■研究活動

## 〈生活一文脈〉から考える映画『プリズン・サークル』における痕跡

〈生活一文脈〉理解研究会  
打越 正行, 宮内 洋, 松宮 朝, 新藤 慶

Reconsidering the Film “Prison Circle” from the Perspective of  
the Context in Everyday Life

UCHIKOSHI Masayuki, MIYAUCHI Hiroshi,  
MATSUMIYA Ashita, SHINDO Kei

愛知県立大学教育福祉学部の共催,そして〈生活一文脈〉理解研究会の主催により,シンポジウム「〈生活一文脈〉から考える映画『プリズン・サークル』における痕跡」を開催した。シンポジウムに先立ち,映画『プリズン・サークル』の上映会を実施した。なお,上映会とシンポジウムは,愛知県立大学教育福祉学部において開講された「現代社会論」の講義の一部として開講されたものである。

### 企画の経緯

『プリズン・サークル』(監督:坂上香,公開:2019年日本,配給:東風,136分)は,日本の刑務所を初めて内部から記録したドキュメンタリー映画である。本企画を提案した打越は,2020年7月に同作品を初めて視聴した。その直後,もし〈生活一文脈〉理解研究会のメンバーでこの映画を視聴し,議論したとしたら,先ほどの映像の見え方が変わってくるのではないかと考え,興奮しながら帰路についた。研究会は,人びとの〈生活一文脈〉を重視し,その行為や語りを理解することにこだわり調査研究を蓄積してきた(宮内2008)。研究会主宰の宮内洋(群馬県立女子大学)は一生活を／から読むことには一貫した,他方で調査における出会いから柔軟に変化を遂げる一剛柔併せ持つフィールドワーカーである(宮内2005)。特に映像分析を専門とする宮内と映画の細部や登場人物の〈生活一文脈〉にもとづいた理解を深めるこ

とに期待が膨らんだ。

打越と宮内の関係について簡単に述べると,打越は,宮内によって2000年の年末に開講された集中講義を受講した元受講生である。講義の中で阪神・淡路大震災直後の様子を記録したドキュメンタリー番組を視聴し,そこに一人の女性高齢者が語るシーンがあった。番組の構成も学生の読みも,ありきたりなものだった。しかし宮内は,彼女の発する言葉から彼女が経験してきた歴史について,ある解釈を示した。それはその地域,その時代を生きた人間にしかわからない視点であった。その視点を意識した後では,先ほど視聴した映像が異なる映像のように思えた。少なくない受講生が,そのような些細な言動に,物事を幅広くかつ深く読み取るポイントがあることに圧倒された。打越にとっては,2000年に受けた衝撃はいまだに忘れられない記憶である<sup>1)</sup>。このような自身の視点の組み換えをとまなうエキサイティングな学びを,愛知県立大の講義においても受講生に提供できればと考え本企画を実施するにいたった。

2021年9月3日、愛知県立大学S201教室にて、『プリズン・サークル』の上映会を行い、休憩をはさんでシンポジウムを実施した。シンポジウムでは、研究会から打越と宮内がコメンテーターとして、坂上監督にはそれへの応答を行ってもらった。以下、それぞれの発言内容を簡単に紹介する。

## 打越によるコメント

### ——Therapeutic Communityと地元を生きる

打越は、沖縄で10年以上にわたり暴走族やヤンキーの若者たちへの参与観察を実施してきたフィールドワーカーである。そこで出会った男性たちの刑務所から地元への移行過程から、映画で描かれたTherapeutic Community (以下、TC)<sup>2)</sup>の意義についてコメントした。

まずは映画で登場した男性たちの生きる世界について、印象に残った場面を中心に振り返った。映画で描かれた彼らの世界は、暴力の日常と奪われ続けた日々として映った。受刑者の翔さんは中学時代に先輩から「ボコボコ」に殴られた経験を語る。そこでは暴力を防御するために構えた腕さえも、先輩の指示によってさげざるをえなかった。その場面を「圧倒的な感じだった。嫌んだけど、思い通りにできる手段を得たような気がする」と振り返った。ここで語られる「圧倒的な感じ」とは、不快感を表出することさえ奪われた圧倒的な支配と従属の姿であった。

また窃盗を繰り返した真人さんは「窃盗に関しては、(被害者に)与えた影響が何なのかよくわかっていない」と呟いた。そこからは、彼のこれまでの人生で与えられた経験はほとんどなく、奪われ続けてきた人生であったことがみえた。

これらの暴力の日常、そして奪われ続けた経験を生きるなかで、彼らはとにかく現在の目の前の状況を生き抜くことに集中せざるをえない生活戦術をとった。そこには生活で繰り返し形作られていく日々のルーティーンがみえない。児童養護施設で16歳まで過ごした拓也さんは、2カ月だけ一緒に住んだ母親のシャンプーのにおいを微かな記憶としてたどりながら振り返る。それは不確かで消えてしまいそうな生活の記憶であるゆえに、繰り返

返し思い出されるものとなっていた。このように、犯罪の加害者である彼らは、同時に暴力の日常を生き、奪われ続けた被害者であった。

続いて、これらの環境を生きてきた彼らにとってのTCという経験について述べた。それは、「目を見て話してくれる。名前で呼んでくれる。尊重されている」(翔さん)、「誰かに言って、否定されるとか、どうにもならない経験しかなかった。話してちゃんと聞いてもらえたっていうのは、すごくいい経験を積んだことになる」(拓也さん)と語られる。支援員も受刑者が安心して語ることや隠したいと考えることを隠したり、語れないことを認め、受刑者を人として尊重する。このようなTCプログラムは、上述した過酷な境遇にあった受刑者にとって、貴重な経験となった。出所後に元受刑者が集う場で、互いの存在を否定せずに率直に(見方によればやや強く)意見を伝え合う場面があった。この場面は、刑務所内でもTCプログラムを経験した者たちによる信頼関係が形成されていたと打越は解釈した。この関係が構築されるためにはTCプログラムに加え、刑務所内での休憩時間の存在も大きく効いていた。

最後にTCを経験した元受刑者が住まう場となる地元への移行過程について述べた。いままでの刑務所では、刑務所を出所する前と後の生活が完全に分断され、受刑者は「一緒になにか食べながら、おしゃべりしながら、間合いがちゃんととれる」<sup>3)</sup>(坂上・宮地2021:133)社会的スキルを習得することが難しい状況にある。

他方で打越が実施した社会調査では、地元には「男たちのどうしようもない」世界があった。そしてそれは彼らにとって日々繰り返される生活のルーティーンとなっていた。そこではたわいもない冗談であったり、知人のうわさ話、そしてギャンブルの勝ち負けをいつもの相手に毎回同じように語る。その姿は平凡にうつるが、それさえも獲得が危うい、もしくはもちえていない者たちにとって、おそらくはじめて獲得した生活のルーティーンであり、安定的な人間関係の基盤となった。それらを「遅れた／間違った世界」としてのみみることで、こぼれ落ちてしまう地元のもうひとつの姿がある。それは映画で描かれた暴力や支配関係を基軸とするホモソーシャルな世界でもあるが、同時にそこには支配—従属関係に還元できない持ちつ持たれつのある関係がある。そこで男たちは

番号ではなく名前をもち、相互にかわりのきかない存在として地元社会に巻き込まれていた。

元受刑者たちの多くは、ここで述べたもうひとつの地元にも生きていく。その地元で生きるためにTCはいかに効くのだろうか。まず地元とTCはどちらかを選択するような二項対立の関係にはない。また片方からもう片方へと進んでいくような関係にもない。元受刑者にとってTCで経験したことが出所後に生きる地元で続くことはおそらく難しいだろう。しかし、地元を生きるなかでその経験は消え去ることはないだろう。刑務所で経験したTCと地元での生活は、元受刑者たちにとって連続したものとしてあり続け、それらを行き来しながら生きる。TCは、今まで切断されていた受刑者の出所前後の生活をつなぎ合わせ、また複数の世界を行き来しながら生きることを可能とする経験と位置付けられる。

## 宮内によるコメント

パネリストの一人である宮内は、このシンポジウムにおいて、映画『プリズン・サークル』を初めて観たことの衝撃と重苦しさについて語った。

まず、自己紹介の際に、宮内が公認心理師や臨床発達心理士であることが語られ、大学教員以外に相談業務にも携わっていることが触れられた。さらには、本シンポジウムのタイトルにも含まれている〈生活一文脈〉についても若干の説明がなされ、また〈生活一文脈〉理解型フィールドワークの実践についても、宮内(2005)や、共編著書の根ヶ山ほか編(2019)の紹介がなされる中で説明がおこなわれ、先の臨床経験とともにその後の議論に活かされると期待されていたが、時間の都合で陽の目を見ることはなかった。

現在は群馬県立女子大学文学部国文学科教員である宮内から、永山則夫の文学研究もおこなっていることが語られた。永山則夫は衆知のごとく、未成年時に4名の一般市民を射殺し、最終的に死刑執行がなされた人物であるが、獄中において執筆活動をおこなったことでもまたよく知られている。殺人を犯す以前にも、幾つもの罪を犯すことにより若い永山は収監されているが、その時の地獄のような体験もまた小説で描写している。このよう

な描写を読み続けることによって、刑務所のイメージは少なくとも明るいものとはならない。さらに、群馬出身の詩人、萩原朔太郎には群馬の前橋刑務所を描いた作品がある。萩原朔太郎「監獄裏の林」である。宮内からはその詩の紹介がなされた。その一節「河原に冬の枯草もえ／重たき石を運ぶ囚人等／みな憎さげに我れを見て過ぎ行けり。」は、現在の描写ではないが、監獄から連なる刑務所に対する、私たちの心の奥底にあるイメージはまだこのようなものではないかという問いかけがなされた。

しかし、映画『プリズン・サークル』の舞台となったのは、2008年に島根県に誕生した国と民間事業者が協同で運営する「島根あさひ社会復帰促進センター」であり、上記のイメージとはほど遠いものであったと宮内は驚いていた。そして、当該センターのホームページから引用しながら、この施設の現代における進歩性などについても触れていた。

シンポジウム全体を考慮して、まるで露払いに徹していたような宮内だったが、この後は、映画を初めて観た後の素朴な疑問等を投げかけていた。

まず、このシンポジウムで映画を観る前に、坂上監督の論文等をすでに読んだことによって、論文内の会話等を後から映像で観ることの不思議さ、また坂上監督の論文に登場するA君やC君はこの人なのかと謎解きのように観てしまう奇妙さなども語られた。

宮内は、この映画に登場した二人の人物に注目していた。まず、一人目は、拓也さんだった。宮内は、内面と状況を適確に語るができる言語能力に驚いたという。映画内の彼自身が何も話せなくなる時に発した「～察してほしい……。」という言葉に驚かされたという。坂上監督も『プリズン・サークル』の軸に据えていたように見えたのは、そのせいかという推測もおこなっていた。ただ、別の論文において、坂上監督が彼のことを「端的に言うと表面的」と評価していたことが少し気になったとも述べていた。

次に二人目は、「支援員」の毛利さんだった。宮内は、刑務所では非常に異質な彼女の笑顔に注目していた。男性のみの刑務所内では笑顔が光る彼女はまさに「まぶしい存在」、さらには「TCユニットにおける〈光〉の存在」なのではないかと指摘していた。

時間の関係から宮内はかなり言葉少なめにシンプルにしか語らなかったが、自らの小中学生時の体験から、一度なめられてしまうと、まるで「奴隷」のような存在として徹底的に虐げられる「男性の世界」が存在することを指摘し、その世界でサヴァイブしていくためには、相手に「なめられない」ように威嚇し続けたいといけなこともまた述べていた。このような世界の中で生き延びてきた受刑者たちが、「TCユニット」のような場で、自らのいじめの被害体験を語ることは、自らの“弱み”を周囲に晒してしまうことになり、臨床的な意味とは異なる、かなりハードルの高い行為ではないかと指摘していた。

最後に、宮内は坂上監督に二つの質問を出していた。

まず、9章のラストを「ギブアップや」という言葉のシーンにしたのはなぜかというものであり、周囲の人たちが「証人」だと述べる箇所を9章を閉じるという方法もあったように思うと素朴な疑問を投げかけていた。もう一つの質問は、6章での健太郎さんが「儀式化している」と表現した言葉の意味を問うものであった。ここからパネリストによる刺激的な議論がなされるはずであった。

## 坂上監督による応答

まず、宮内から出された「ギブアップや」という言葉で9章を閉じたことへの応答がなされた。坂上監督の映像の撮り方としては、ある解釈を押し付けることを避けてきた。トータルに世界を撮り、被写体となる人物と時間をかけて信頼関係を築いて撮るスタイルをとってきた。この場面については、さまざまな制約もありつつ、わかりやすくきれいに終わるより、元受刑者の関係性や場所や発言の意味をめぐる解釈を視聴者に委ね、ニュアンスをおおせた撮り方をした。そのように撮ることで、あの場所が確かな場所ではなく、ギリギリのところでも成立していることを残したかった。

続いて、宮内による健太郎さんの発言をめぐる質問に応答がなされた。きれいに編集するより、彼らの制度に対する批判も盛り込みたかった。サンクチュアリー（安全安心な場所）という言葉が本音の語れる場所として語

られるが、それはいったん作られたら終わりではなく、常に作り続けていかなければならない。刑務所の所長が変わったら体制もはっきりと変わることがあり、それらの雰囲気の変化を受刑者が表現しようとする場面は確かにあった。しかし健太郎さんの批判ととれる発言を使えたのはあの場面だけで、十分に映像には残せなかった。TCはみんなが我慢していい子を演じる場所ではなくて、おかしいと思ったらおかしいと伝えたり、相手の発言についても突っ込めることが重要だが、刑務所のデフォルトが大きいのでそのハード面が変わらない限り、あそこだけをサンクチュアリーとして捉えるのは難しい。

打越による2つのコミュニティに関するコメントは、興味深く聞いた。TCでは先輩一後輩の上下関係は固く禁止されていたが、経験者として教える一教わる関係は成立していた。多少のトラブルやけんかはあるが、先輩格の人がいじめには発展しないように見張っていた。「隠すことよりあかすこと」といったことが掲げられていたためではないか。

打越コメントにあった、余暇時間の意義については、元受刑者は重要なものと位置付けている。プログラムの後に続きの話を個別に語ったり聞いたりしている。映画には映っていない余暇時間は、元受刑者からもTCプログラムとともに大切な時間であったと指摘された。そこでコミュニティが形成されているように感じた。

またTCと地元の接続関係についても応答がなされた。翔さんは、出所後すぐには地元に戻らなかった。いったん生まれ育った土地とは異なる更生保護施設に通いながら雇用される機会を得た。そこで1年ほど働き、自助グループや支援系のイベントに通って、人と会うことを重ねたのちに、生まれ育った地元に戻った。1年間の猶予があったことで、TCとはまったく異なる現実があることを知り、見識を広げることができた。そのような準備ができてから地元に戻ることでスムーズに地元への移行が可能となった。

今後は、専門家だけでなく、元受刑者の当事者によるプログラム担当者が求められてくる。子どもへの虐待殺人や性犯罪に関しては、窃盗や暴行の受刑者と一緒にTCを進めることが難しい現状にある。ある元受刑者の話によると、信頼するにも段階があり実際には2年ほど時間がかかった。犯罪の種類によっては、それらの信頼

関係をつくるのに時間がかかるため、当事者による信頼できるロールモデルが求められている。

最後にマッチョな世界について、補足説明がなされた。元受刑者が生きるマッチョな世界、そしてそこで生じる元彼女へのDVについては、今までに実施されてきたTCでは十分に踏み込めていないという課題が残っている。

#### 付 記

シンポジウム開催にあたり、共催の愛知県立大学教育福祉学部より助成を受けた。心より感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 集中講義の詳細については、打越(2018)を参照。
- 2) Therapeutic Communityとは、「同じような問題を抱えた人々が、問題の根本原因を探り、人間的成長を促し合うことで、結果的に問題も解消していくという発想で運営されている」場である(坂上2020, 87頁)。1940年代半ばに英国の精神病院で始

まったとされているが、詳細については坂上(2012)を参照のこと。

- 3) 引用箇所は宮地による発言である。

#### 文 献

- 宮内洋, 2005, 『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房。  
———, 2008, 「〈生活一文脈主義〉の質的心理学」, 無藤隆・麻生武編『質的心理学講座第1巻 育ちと学びの生成』東京大学出版会, 191-215。  
根ヶ山光一・外山紀子・宮内洋, 2019, 『共有する子育て——沖縄多良間島のアロマザリングに学ぶ』金子書房。  
坂上香, 2012, 『ライフファーズ 罪に向きあう』みすず書房。  
———, 2020, 「受刑者の痛みと応答 映画『プリズン・サークル』を通して」, 『臨床心理学』金剛出版, 115: 86-90。  
坂上香・宮地尚子, 2021, 「『被害』と『加害』の螺旋を超えて——『プリズン・サークル』から考える」, 『環状島へようこそ——トラウマのポリフォニー』日本評論社, 119-146。  
打越正行, 2018, 「『先生かどうかわからない人』が教えてくれた他者への想像力の磨き方——いまも忘れられない大学の講義」現代ビジネス (<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/58702>, 2018.12.13)。